

面白いほうへ行動あるのみ



安達裕哉さん。ニュースサイト「ザ・ハフントン・ポスト」日本版にもビジネスや経営などについて不定期で記事を掲載している



山下知之之さん。「人と同じことをしたら意味がない」と、岐路に立つたびに自分で道を選択してきた

少年誌に連載され、爆発的な人気を集めた漫画「スラムダンク」に後押しされ、麻布でもバスケット部に入部希望者が殺到したという。

外資系の人事コンサルテイング会社で在日代表をつとめる山下知之之さん(39、1994年卒)はバスケット部で会計担当を任されていた。

部員が膨れあがり、夏合宿の費用だけでも約500万円に上った。麻布の場合、学校支給の活動費も、国のように各々が予算案をつくり、交渉して勝ち取る仕組み。バスケットにも熱中したが、お金の扱いにもひかれた。粘り強い交渉の末、「歴史

的予算」も勝ち取った。一橋大に進み、公認会計士をめざす。4年生で合格。東京三菱銀行(当時)に入ったが、思うような仕事ができず転職。

人事コンサルタント会社を経て入ったゴールドマン・サックス証券では企業統合などを担当し、がむしゃらに働いた。

今のマクラガンパートナーズアジアインクは金融業界に特化した人事コンサルタント会社。家族が増えて「時間的な余裕がほしい」との思いもあつて35歳で移った。会計、金融の経験をさまざまな形で発揮できている。

「何が正しいのか、自分で考えろ、と麻布でた

も根底にある」バスケット部で同期だった安達裕哉さん(39、94年卒)は2013年秋、12年いた監査法人系のコンサルタント会社を辞めて独立した。社員2人のテイクアウト。教育関係のwebサービスをつくっている。アクセス数が月220万を記録したこともある人気プログラマーの顔も持つ。

筑波大学院で植物生物学を学んだが、パソコンにのめり込んで方向転換した。前職では品質マネジメントや企業向けの教育研修など、全国を飛び回って「めっちゃくちゃ」働いた。ただ就活のときから「会社の歯車になりたくない」と思ってきた。

30代後半になり、人生も折り返し。何をやらしたら楽しいか。何をやりたいいのか、原点に立ち返った。38歳の決断。半年後に長女が生まれた。

小学校時代、横並びで管理され、学校が息苦しかった。両親から「自由で面白そうな学校だから」と勧められたのが麻布だった。板を持参して机を広げたり、拾った冷蔵庫を教室に持ち込んだり、驚くほど自由だった。居心地がよかった。

「行動しないやつはダメ、と麻布で学んだ。面白くことを思い切って試したい」(佐藤善一)